ウェールズの英雄像を追って

──「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」から ──

中　野　節　子

14 世紀から 15 世紀にかけて，ウェールズの地でまとめられたと考えられている散文物語集，― 一般には『マビノギオン』（*Y Mabinogion*）と呼ばれている書物―に収録されている 11 編の物語中の第三グループ「フランス風のロマンス」の第二話が，「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」（‘Historia Peredur vab Efrawc’）である。この物語は,他の二つのロマンスと同様に，12 世紀のフランス宮廷詩人クレティアン・ド・トロワ（Chretian de Troyes）の手になる未完の物語詩「ペルシヴァル，聖杯の物語」（‘Perceval, ou le Conte du Graal’）の影響を強く受けて生まれ，ノルマン・フランス風のロマンスの雰囲気を色濃く留めた物語である。ウェールズの散文物語が先に存在したのか，それともフランスの宮廷詩が先かという問題は別として，確かにいえることは，物語に登場してくる主人公たち，ペレドゥルが冒険の中で遭遇する不可思議な生き物，数々のエピソードなどには，原材料を提供したウェールズ固有の伝説話の影が色濃く残されているという事実である。冒頭に登場する天衣無縫の少年ペレドゥルは，物語の最後には，数々の冒険や課題をこなして，アルスル（Arthur）（アーサー王）の宮廷の名だたる騎士の一人となり，やがては後の「聖杯の騎士，パルシヴァル」へと変貌してゆくことになる。

この「ペレドゥル物語」の現存する完全なテキストは二種類ある。そのひとつは，『レゼルッフの白い本』（*Llyfr Gwyn Rhydderch*）のコラム 117 から 178 までに収録された，「ペニアルス 4 」（Peniarth 4）の写本（13 世紀の終わり頃から 14 世紀の中頃までに書き留められたと推定される）である。二つめのものは，同じ写本からとられたと想定される，『ヘルゲストの赤い本』（*Llyfr Coch Hergest*）のコラム 655 から 697 までのテキストである。これら完全稿のほかに，より古い成立の『白い本』の方には，「ペニアルス 7」（遅くとも 14 世紀のはじめ頃に成立）の写本からのものと思しき部分（コラム 605 から 648 まで）と，「ペニアルス 14」（14 世紀中頃のもの）の写本からの断片（コラム 286 から 290 まで）とが加わっている。

1.　構　成

物語は，大きく三つの部分で構成されている。

1）　主人公の少年ペレドゥルが，立派な騎士になる訓練を受ける物語と，意中の女人である「黄金の手のアンガラッド」（‘Angharad Law Eurawc’）を勝ち得るまでの最初の冒険の話
2）　コンスタンティノープルの女帝（Empress Christinobyl）と共に，14 年間統治するまでに至る，次なる冒険の話
3）　アルスルの宮廷に戻り，第一部の叔父の宮廷で目撃した生首と血潮の滴る槍の謎を追っての探求の旅と，カエル・ロイウ（Caer Loyw ）（グロースター）の魔女退治の話

である。

最初に登場してくる賢い母から始まって，恋人アンガラッドと共同統治者であり妻ともなったコンスタンティノープルの女帝，ペレドゥルに殺されることになる魔女等，ペレドゥルが関わりをもつ女性たちは総勢18名にのぼり，多彩な女人の活躍がこの物語の特徴である。以下，これらの女性たちの主要な人物に絞って，彼女たちが英雄ペレドゥルの誕生にあたって，どんな意味をもつかということを探ってみたい。

2. ペレドゥルをめぐる女性たち

物語に登場してくる順に，これらの18名の女性たちをあげてみると次のようになる。

① ペレドゥルの母
② 天幕の乙女
③ アルスルの妻グウェンホヴァル（Gwenhwyual）
④ 女の小人
⑤ 深皿を捧げ持つ乙女
⑥ ペレドゥルの養家の娘
⑦ 襤褸をまとった乙女（クレティアンの物語ではブランシュフロール（Blancheflor）と呼ばれている）
⑧ 「山の城」の伯爵夫人
⑨ カエル・ロイウの9人の魔女
⑩ 黄金の手のアンガラッド
⑪ 「丸い谷」の乙女（「黒い圧迫者」（‘Du Trahawc’）の娘）
⑫ 丘の婦人
⑬ 功績の伯爵夫人
⑭ 粉屋の妻
⑮ コンスタンティノープルの女帝
⑯ 黒い乙女
⑰ （グワルッフマイ（Gwalchmei）の冒険に登場する乙女）
⑱ 王の娘
⑲ 森中の騎馬の婦人

以上，ペレドゥル関係では18名，グワルッフマイ関係の1名，総勢19名の女性たちが登場してくるのである。

以下，主としてペレドゥル関係の女性たちを，母，恋人，最後に対決することになった魔女たちと，3つのグループに分けて考えてみたい。

⑴ ペレドゥルの母

夫エヴラウク（Efrawc）（北イングランドのヨーク）伯と6人の息子たちのすべてを戦いで失ったこの伯爵夫人は，残された最後の息子ペレドゥルを何とか手許に残そうとして，戦いを好まぬ穏やかな男たち，女と子どもとともに，荒野に逃れて隠遁の生活を送ることにした。こうして育てら

れた少年ペレドゥルは，雌鹿を追い詰めるまでの足の速さ，柊木の木片（ダート）を投げる腕前の見事さ等に抜きん出た素質を示して，周りの者を驚嘆させる，まさに狩猟の民のヒーローとなるべき「怪童」（‘Wonder Child’）として登場してくる。しかし賢い母親の願いと努力もむなしく，生来の戦士の血はあらそえず，ときがくると，アルスルの宮廷からやってきた３人の騎士たち（グワルッフマイ，グウェイル，そしてオウァイン）の後を追って，この森の静かな生活から巣立っていくのである。息子の出立の際，賢い母親の与えた助言は，まことに奇妙なものであった。

① アルスルの宮廷にむかいなさい。なぜならば，そこには，最も寛容で，勇敢な，最高の男たちが集っているのだから。
② 教会を見たら，祈りを唱えなさい。
③ 食べ物と飲み物を見たら，たとえそれがあなたのために供されたものでないとしても，とっておきなさい。
④ 叫び声を耳にしたならば，すぐ駆けつけなさい。それが女人のものであるならなおのこと。
⑤ 美しい宝石を見たら，それをとっておき，ほかの者にあげなさい。そうすることによってあなたの名誉がますことでしょうから。
⑥ 美しい女人を見たら，たとえ彼女があなたを望んでないとしても，愛しなさい。そうすることによって，あなたは以前よりも善良で，高貴な人物になることでしょうから。(278)

以後，母親っ子のペレドゥル少年は，これら６ケ条にわたる母の忠告を忠実に守りながら，彼の冒険をつづけることになる。

このような母の助言の内容をつぶさに見ると，いずれも息子の安全を第一と考える切ない母心の反映であることが分かる。何よりもまず，自らの生存を保証するためのものを確保するということに尽きるということが興味深い点である。自分の身の安全を守るものとして，よきもの，価値のあるもの，すなわち食べ物や飲み物，宝石類の確保をすすめ，次に他者，特に困窮している者を救う行為を奨励し，その際たるものとしての女人の救済が加えられ，最後にあげられるのが，中世宮廷の愛の典型となる女性崇拝の恋愛の助言となっていることが分かる。きわめて私的で，私情のかった母親の助言であった。こうして息子の巣立ちを見送った後に，最愛の息子を失ったこのエヴラウク伯の夫人は，失意のあまり死んでしまったと物語は語る。母の死の知らせをペレドレルは，探求の旅の途上で，養い親の家の娘から聞くことになり，彼女にその配慮のなさを，激しく糾弾されるのだった。

⑵ 恋人たち—黄金の手のアンガラッドとコンスタンティノープルの女帝

⒜ 黄金の手のアンガラッド

この女性との出会いはまことに唐突で，彼女の属性ともなっている「黄金の手」についても，一体それがどんなものであるのか，本文中にはなんらの説明もない。

ペレドゥルが彼女に最初に出会ったのは，さまざまな冒険をくりかえした末，やっとアルスルの宮廷に到着し，最初の晩をそこで過したときのことであった。彼はすぐにこの娘を見初め，「あなたは，ほんとうにたおやかで，うるわしいお方だ。最高の婦人として，わが意中の方としたい」と申し出る。しかし娘の答えは，「永遠に，私があなたを愛することも，あなたのものとなることもないと存じます」という，まことにつれないものであった。ペレドゥルは，「あなたが，あらゆる男たちの中で，私を一番愛して下さると告白してくれるまでは，どんなキリスト教徒とも一言も話をしないと誓います」という誓約を立てて，冒険に出発して行くのである。それ以後ペレドゥルは，一言も自分の名前を明かすことなく，さまざまな試合に出場しては，その無敵ぶりを発揮し，やがてふたたび，アルスルの宮廷に戻ってきて，トーナメント試合に臨むこととなった。「沈黙の騎士」

という名が示す如く，無言の騎士であった。しかしアンガラッドは，この騎士を心から愛していると告白する。そのときペレドゥルは，やっと自分の身分を明かすことになり，彼女との約束を守り通したことを立証するのである。これでめでたく二人は相思相愛の関係になったと推察されるが，一体ペレドゥルがその後この女性と結ばれたのかどうかということは，不明である。すくなくとも彼らが結婚したという事実はない。

(b)　コンスタンティノープルの女帝

きわめて不明瞭なアンガラッドとの関係に対して，明らかにペレドゥルの伴侶になったと思われる女性が，このコンスタンティノープルの女帝である。

幾多の冒険の末，ある川の岸に到着したペレドゥルは，次々と集まってくるたくさんの人々，そこに張られた様々な色彩の天幕に驚嘆する。これらの人々のための食料を供給する役目を帯びて，そこに存在していたのが粉屋の夫婦であった。この男とその妻の役割ははなはだ興味深いものがある。彼らの手引きと協力によって，ペレドゥルは女帝の催したトーナメント試合に参加し，次々と対戦相手を打ち破って，最高の男であることを証明する。こうしてペレドゥルはめでたく女帝と結ばれ，彼女の所有する国土の統治権を獲得し，女帝とともに14年の間，その地を治めたと物語は語る。土地の権利と豊穣は，全て女性が所有するという考え方は，広くケルト社会に共通の思想であった。したがって，土地の統治を主張する男性たちは，競って自分こそがそれにふさわしい男であるということを示し，女性と結ばれようと戦うことになったのである。ロマンスものの第一話，「泉の貴婦人の物語」（‘Chwedyl Iarlless y Ffynnawn’）も，まさにその典型的な例話となっているのが分かる。

しかしこの物語においては，女帝がどういう出自の女性であるかは定かではない。考えられるのは，「マビノーギの4つの物語」（‘Pedeir Ceinc y Mabinogi’）に登場してくる女主人公リアンノン（Rhiannon）などと同様に，別世界の住人であろうということぐらいである。ペレドゥルが，この女帝と思しき，今まであった中でも，もっとも美しい女人に会ったのは，洞窟に潜む怪物アダンク退治におもむこうと，ある小山の頂のそばを通過していったときのことであった。彼女はペレドゥルに魔法の石を与えた後，その姿を消してしまう。それからペレドゥルのアダンク退治の旅が開始するのだが，その旅に出てゆくのに先立って，ペレドゥルはさまざまな不思議な光景を目撃した。渓谷にさしかかったとき見る，川岸を越えてやってくるごとに，白と黒，互いにその色を変える羊の群れ，川の岸に立つ，片側は真っ赤に燃え，もう一方の側には緑の葉が茂った高い樹木などは，まさにこの世とあの世との境界にある，不思議な存在であるといえるだろう。姿を消してしまった美しい女人を追うペレドゥルの旅とアダンク退治の冒険の旅は，このようにして始まっている。そして最後には，女帝と結ばれる大トーナメント試合の場所に到着するのであった。ペレドゥルとこの別世界の女人をつなぐ人物として，すなわち仲介者，または門番役として，粉屋夫婦が登場してくるのである。しかし終始ペレドゥルを支援し，全面的に協力を申し出る粉屋本人に対して，彼の妻の反応はいささか冷ややかなものであった。トーナメント試合のたびに，準備のための資金を貸してくれと頼むペレドゥルに，彼女は次第に態度を硬化させ，その見返りを要求することからもそれは明らかである。それに答えてペレドゥルは，トーナメント試合で手に入れた褒美をすべて彼女に献呈している。

(3)　カエル・ロイウの魔女たち

以上みてきたように，陰に陽に若者ペレドゥルの成長を援助する女たちに対して，この魔女たち

というのは，複雑な役目を帯びて物語に登場してくる。

まずペレドゥルが彼女たちに会うのは，物語の最初の部分，すなわちペレドゥルの修行物語の中でのことである。母親の庇護のもとから，広い世界へと旅立って行った際のペレドゥルの様子は，お世辞にも颯爽としているとは言えなかった。寄せ集めの武具，投げ矢として使う棒切れをたずさえ，よれよれの駄馬にまたがり，ただ騎士という男たちの存在に憧れて，森から出立していったからである。そのペレドゥルに，世の中に出て通用するような礼儀作法と武器の使い方を手ほどきしたのは，母方の二人の叔父たちであった。最初に会った，足に傷を受けている叔父はペレドゥルに言う。「今や母親の言葉を離れるときなのだ。私がそなたの師となり，そなたを騎士に任じてあげよう‥‥何か奇怪なことを見ても，それを自分で追求せぬこと。そうはしないで，親切に教えてもらうまで待つのだ。とがめられるのはそなたではなく，師である私なのだから」(287-8)。この言葉の意味するところは，示唆的である。その後，ペレドゥルは，とある伯爵夫人の領地を荒らしていたカエル・ロイウの９人の魔女の城に，3週間滞在し，彼女たちから馬の乗り方や武器の扱い方を習うことになる。しかし不可思議にも魔女たちは，ペレドゥルに出会ったときから，この男が，やがて自分たちを滅ぼす者になることを，予言の中で察知していたと語っている。案の定，最後の決戦で，魔女たちの予感は的中し，「彼女らとともにいて騎士の修行をし，彼女らを殺す」と予告されていた，この男ペレドゥルとアルスルの軍勢によって，カエル・ロイウの魔女たちは全員殺されてしまい，ペレドゥルの物語は終わることになっている。英雄の修行に手を貸し，やがては当の英雄自身に滅ぼされてしまう女性として，魔女たちが登場してきているのが分かる。しかし考えてみれば，英雄ペレドゥルに命を与えた彼の母とても，息子の巣立ちによって，失意の中にその命を落とすということになっている。親と子の宿命的な関係，すなわち，娘や息子がひとり立ちすることによって，その使命を終え，表舞台から姿を消さねばならない，親という存在の根源的な悲哀のようなものを垣間見せる箇所でもあり，父と娘という関係になってはいても，これと同じ構図は，あの巨人イスパザデン（Yspadaden）と娘オルウェンの物語（七話）の中にもはっきりと読み取ることができるのである。

怪力無双，しかも天衣無縫の野性児として登場してくる怪童ペレドゥル。彼は庇護者母親の懐から飛び立って，数々の冒険を重ねた末，母親がいみじくも息子に「天使」と偽って説明した，憧れの騎士の一人となり，アルスルの宮廷で活躍する英雄となってゆく。その成長過程を見てみると，以上のような数多くの女人たちの協力関係が見てとれるのである。日本の『古事記』の中に登場する英雄ヤマトタケル（オウスノミコト）の物語にも，やさしげな顔立ちをしているにもかかわらず，そのあまりにも荒々しい性質のために，父の帝に恐れられ，旅から旅への遠征の生涯を送るこの主人公には，その身の安全を祈って，草薙の剣を授ける叔母のヤマトヒメ，夫の無事の帰還を願い，犠牲となって，相模の海に身を沈める妻オトタチバナヒメ等の女性の存在があった。洋の東西を問わず，抜きん出た英雄の誕生には，このように，並々ならぬ女性の力があずかっていることが分かる。女性の心をとらえぬ限り，英雄にはなれないとまで言い切ってしまっても過言ではあるまい。とくに「宮廷風恋愛」（‘amour courtois’）というのが，至上の道徳のひとつとして重んじられている，西洋のロマンスの世界においては，女性たちの共感を得るということが，英雄たちの絶対不可欠の条件になってくる。

ウェールズを代表するペレドゥルの英雄たる所以は，このような周囲を囲む女性たちの援助もさることながら，母親の助言を後生大事に守り続ける彼の素直さ，相手の気持ちを常に最大に配慮して，自分の思いを決して無理強いしない彼の謙虚さ，あくまでも夢見る心を失わない彼の繊細さ等

に，その類まれな武勇が裏打ちされているところにあるように思われる。アルスルの妻グエンホヴァルに加えられた不当な侮辱をはじめとして，女たちの権利と品位を守り，ゆえなく奪われた財産を取り返してやり，彼女たち自身も愛する人と結ばれるように手助けするのをいとわないその姿は，まさに男女の差を越えて支持される，英雄の名に値するものであろう。こうしてペレドゥルは，叔父の脚を傷つけ，従兄弟を殺した魔女たちを滅ぼして，母方の家族の復讐を遂げ，コンスタンティノープルの女帝と結ばれることによって，正統な統治権を獲得し，最後にはめでたく「不思議な城」（‘Caer yr Emryuedodeu’）へと到達して，魔女たちを打ち倒し，その探求の旅を終えることになった。聖杯の騎士パルシヴァルへの変身は，その後の物語の中でのことである。次にペレドゥルの退治した怪物の幾つかを取り上げて考えてみたい。

3. ペレドゥルに退治された妖怪たち

⑴ 塚の黒蛇

ペレドゥルは荒野の館で，「黒い抑圧者」と呼ばれている大柄で一つ目，黒い肌をした男から，「悲しみの小山」の塚に住む黒蛇の話を聞き，それを征伐することを決意する。何人かの騎士たちが，蛇がその尾のところに抱える石を手に入れたいと望み，ペレドゥルと一緒にその蛇を退治したいと申し出る。しかしペレドゥルは彼らの協力を断り，たった一人で黒蛇を退治すると，彼の家来になりたいと志願して，それまで行動をともにしてきた「赤い剣のエドリム」（‘Edlym Gleddyf Coch’）に，黒蛇が尾のところに抱えていた石を与え，愛する妻の元へ帰るようにと言う。その石というのは，片手にそれを握れば，もう一方の手に，望むかぎりの黄金がつかめるという魔法の石であった。

⑵ アダンク（Addanc）

川や湖水に住み着く怪物で，近づく人を深みに引きずりこんでは，その命を奪うという水の妖怪アダンク（またはアヴァンク）というのは，ウェールズの民話の中で再三登場してくる妖怪である。この物語の中では，毎日一人ずづ息子を殺され，そのつど魔法を使って再生させてやらねばならないという悲劇の城，「悩める王の息子たちの城」の災いの元凶となっている怪物として登場してくる。アダンクがなかなか滅びないのは，この怪物が洞窟に潜んでいて，自分の方からは入ってくる人の姿は見えるものの，相手には自分の姿をくらまして見えなくするという術を持ち，円柱の陰にかくれては，人々に狙いをつけ，毒矢を投げて殺してしまうからであった。美しい乙女から，自分への愛を告白してくれるなら，その術の効力を消してしまう石をあげようといわれたペレドゥルは，娘への愛を告白する。娘はペレドゥルにその石を授け，この後自分を探そうと思うのなら，インディアの方向をめがけてやってきてほしいという謎めいた言葉を残して，姿を消してしまうのだった。（のちにこの娘こそが，ペレドゥルがともに 14 年間の統治を果たす，コンスタンティノープルの女帝であったことを物語は示唆している）。その石の助けをかりて，ペレドゥルは槍で，めでたくこの水の妖怪アダンクを退治するのである。

これらの生き物たちとともに，ペレドゥルが遭遇する不思議なもののひとつが，あたかもそれ自身が生き物でもあるかのように，ひとりでにグウィスブスというゲームを戦う駒たちであろうか。湖の中の城で，ゲームに興じるこれらの駒たちを目撃したペレドゥルは，一方の駒に加担し争うが，ものの見事に敗北を帰してしまう。その後，怒りに駆られて，盤そのものを湖に放り投げてしまうのである。やがてその盤が女帝のものであったことを知り，ひどく後悔することになった。その後，

ペレドゥルは，女帝の領地を荒らす，「エスビティノンビルの城」（‘Caer Ysbidinongyl’）に住む黒い男，森の雄鹿，呼びかけに応えて現れた黒い男との馬上試合に勝利して，「不思議の城」にたどり着き，最終的には，カエル・ロイウの魔女たちを倒して，家族の仇討ちと自らの探求の旅を終えることになるのだった。

12 世紀フランスの宮廷詩人，クレティアンの未完のロマンス詩「ペルシヴァル，聖杯の物語」に収録されているテキストと，この「ペレドゥル物語」との差はいろいろあるが，エピソード的に見て明らかな相違は，次の 5 つである。

1） ペレドゥルが，カエル・ロイウの 9 人の魔女たちのもとに 3 週間の間とどまって，彼女たちから，武器の使い方と騎馬の技術を習う話。

2） ペレドゥルがアルスルの宮廷で，「黄金の手のアンガラッド」と出会い，彼女に恋をするが，娘はペレドゥルへの愛を保留する。ペレドゥルは，娘が自分を愛すると告白してくれないうちは　，一人のキリスト教徒とも口をきかないという誓いを立てる。その後ペレドゥルは無名の騎士としてさまざまな功績を重ね，やがてアルスルの宮廷に「沈黙の騎士」（‘Mackwy Mut’）として戻り，アンガラッドは，もしこの騎士が口がきけたなら，彼を愛するだろうにと告白する。そしてそれはたとえ口がきけなくとも同じことだと宣言した。こうして二人はお互いの愛を確認することになったという話

3） アダンク退治の話。

4） ペレドゥルが，コンスタンティノープルの女帝の土地にやってきて，彼女の保護者となり，女帝とともに 14 年間統治する話。

5） ペレドゥルとグワルッフマイが，アルスルの軍勢の助けを要請し，彼らとともに，カエル・ロイウの魔女たちを成敗する話。

フランスものにはないこれらのエピソードからも分かるように，考えてみると，この「ペレドゥルの物語」が，いかにウェールズの色彩をそのままに色濃くとどめた，独自の物語であるかが明らかになってくる。

「長槍のペレドゥル」（‘Peredur Paladyr Hir’）として登場してくるほかにも，ペレドゥルは，「沈黙の騎士」，「粉屋の騎士」等の名前で，物語のなかに登場してくる。しかしながらその他の『マビノギオン』の物語の中での彼の登場は，いずれもアルスルの宮廷の戦士たちの一人として，リストの中にその名前が現れてくるという程度にとどまっている。たとえば，「ロナブイの夢」（‘Breudwyt Ronabwy’）や「エルビンの息子ゲライント」（‘Gereint mab Erbin’）の物語では，アルスルの 42 人の相談役の一人としてあげられているのみである。その背後に，ウェールズ独自の伝説的な人物たちの物語があったことを推察させる箇所でもある。

また「ペニアルス 133」の写本の中には，「コイドモール（Coedmor）の城，そこにエヴログのペレドゥルがいた，そこはコイドモール男爵の館であった」という記載が見られる。この地はカレディギオン（Ceredigion）のサンゴイドモール（Llangoedmor）で，モーティマー家（the Mortimers）の根拠地であった。しかしながらウェールズのロマンスの中には，「聖杯」への言及は一切見られず，それはクレティアン・ド・トロアの「聖杯の物語」のなかで始まったことである。そこではペレドゥルを思わせる主人公の名前は，「ウェールズ人パルシヴァル」（‘Perceval li Gallois’）となっている。こんなことからも，フランスのロマンスの世界が大陸で広い人気を得てから，再度ウェールズに帰ってきたのちに，その名前をペレドゥルに変えられ，彼の地に残されて

いる伝説的な数々のエピソードが加えられ，「ペレドゥルの物語」としてよみがえり，その後で新たに，フランスのロマンスに登場する「聖杯の騎士」へと変身していったように思われる。

やがてウェールズの地に伝えられる三題歌（triads）の中で，ペレドゥルは，いずれも聖杯の英雄として登場してくるようになる。まず，三題歌 86 では，ガラード（Galaad）とボルト（Bort）という騎士とともに，「聖杯を獲得した三人のアルスルの宮廷の騎士たち」の一人として，「エヴログ伯爵の息子ペレドゥル」があげられている。また，別の三題歌の付加資料のでは，これらの三人には，アルスルの宮廷の「三人の清らかな騎士」という名が添えられている。しかし彼らの周りには，巨人や魔女といった，悪魔的な存在は一切姿を消してしまっていることが分かる。

ペレドゥルの周囲には，いずれも名だたるウェールズの騎士たちの姿があった。その人物像を，主要な 4 人の騎士に限って追ってみたい。

4. ペレドゥルをめぐる騎士たち

⑴ グワルッフマイ（Gwalchmei）

この「ペレドゥルの物語」の最後のところには，きわめて唐突に，グワルッフマイというアルスルの宮廷で活躍する騎士の物語が挿入されている。しかし物語の最後の部分では，ペレドゥルが再度登場してきて，このグワルッフマイとともに，魔女退治をしたという具合に結ばれるのである。このグワルッフマイという騎士は，アルスルの物語の最も有名な英雄の一人であった。

彼は『カマーザンの黒い本』（*Llyfr Du Caerfyrddin*）というウェールズの古書の中に，二度にわたって言及されている。まず彼の馬ケインカレッド（Ceincaled）のことが，「イニス・プリデイン（Ynys Prydain）の三頭のいきのよい軍馬の 1 頭」として言及されているし，彼の墓への言及が，「墓の歌」（‘Stanzas of the Graves’）の中に見られるのである。

『マビノギオン』の「キルッフとオルウェン」（‘Culhwch ac Olwen’）の物語の中では，グウィアル（Gwyar）の息子グワルッフマイの名前が，兄弟のグアルハヴェド（Gwalhafed）とともに，アルスルの宮廷の人物リストの中に登場している。また同じ物語の中に，彼は再度，「使命を帯びた旅に出て，空手で帰ったことのない男。最高の歩き手であり，最高の騎馬の乗り手。アルスルの甥にして，彼の姉妹の息子，彼の第一の従兄弟」と言及されており，オルウェン探索のキルッフの旅の助っ人として，アルスルから選ばれた戦士たちの一人とされている。しかし不思議なことに，それ以上のことは，この「ペレドゥル物語」には記されてはいない。また「ロナブイの夢」の物語では，ペレドゥル同様，彼もまた，アルスルの宮廷の 42 人の相談役の一人としてあげられている。

「ペニアルス」の写本 118 の，巨人の物語のコレクションの中では，グワルッフマイが姦計を労して，三人の魔女たちを殺したと述べられている。しかしそのさまは詳しくは語られておらず，この魔女たちが三人の巨人の妻たちであると記録されているのみである。

後の三題歌（75）の中では，グワルッフマイは「イニス・プリデインで，客人や見知らぬ人たちにとって，もっとも礼儀正しい三人の男たちの一人」とされているし，別の三題歌の追加資料では，アルスルの宮廷の「三人の黄金の舌を持った騎士」の一人として言及されている。あまりにもその話が上手なため，彼の言葉に耳を傾けることのなかった王も主人も存在せず，彼の言い分は好むと好まざるとにかかわらず，聞き入れられてしまったというのである。また，「エルビンの息子ゲライント」（‘Gereint mab Erbin’）の物語の中では，武器の使い方の器用さ，生まれの高貴さからくる威厳からもたらされた名声のゆえに，アルスルの軍隊の九人の隊長のうちの指導者となったと記されている。

たしかにこの「ペレドゥルの物語」においても，すべてに皮肉と悪意にみちた行動をとり続ける，アルスルの右腕的人物カイとは対照的に，話し合いと説得に優れた人物としてのグワルッフマイの人物像が印象的に語られている。こんな点からも，彼はまた，高貴な生まれの，寛大で勇敢な，ウェールズの社会における英雄像の典型としての騎士であった。

⑵　**オワァイン（Owain）**

ペレドゥルが森の中で出会った 3 人の騎士たちのしんがりをつとめるのが，あの北ブリテンの伝説的な英雄ウリエン・レゲド（Urien Rheged）の息子オワァインである。彼は父レゲドとともに，6 世紀の詩人タリエシン（Taliesin）の作といわれる古詩の中に二度にわたって登場してくる。また三題歌の中では，「ブリテン島の三人の立派な王子」とされ，彼の妻，妹，詩人，馬などにもまた，言及されているのである。彼の墓は，『カマーザンの黒い本』の中の，「墓場の歌」の中にも歌われている。年代的にはいささか問題のあるところではあるが，オワァインはまた，アーサー王ロマンス物語の中で大活躍する最大の騎士の一人でもある。「ロナブイの夢」の中では，アルスルとグウィズブスをする様子が詳しく語られている。（226–232）その中には，彼の有する烏軍団が登場している。また「三つのロマンス」の第一話，「泉の貴婦人」は，彼が主人公になった物語である。この物語の最後には，オワァインがアルスルの宮廷にとどまって，みなに愛される軍団の長になり，「ケンヴェルヒン（Cenferchyn）の 300 本の剣」と「烏の軍団」を所有するようになったと記されている。この「ペレドゥル」物語の中では，アルスルの宮廷で林檎を配っていたため，他の二人よりは遅れてしまったという記述があるが，そのエピソードについてのそれ以上の言及はない，ペレドゥルに武具の説明をしてやったり，倒した相手の騎士の鎧や武具をとって，みすぼらしい若者の備えをしてやったりと，何くれとなく世話をやく親切な騎士として描かれている。

⑶　**カイ（Cei）**

アルスルの宮廷の重鎮の中でも，最も身分も高く，アルスルの右腕となって活躍していたのがカイであった。しかし彼の底意地の悪さや，傲慢さは再三にわたって問題視されるところである。この「ペレドゥル」物語においてもそれは例外ではなく，さまざまな不協和音を奏でている。まず，みすぼらしい姿で宮廷に到着したペレドゥルを「戦士の中の戦士，騎士の華」と呼びかけた男女の小人を完膚なきまでに叩き倒してしまうのも彼である。，彼らがこんな男に，そんな評価をくだすのを許せなかったからであった。傲慢で誇り高い彼の性質を如実に示すところである。この小人たちに加えられた理不尽な侮辱と暴挙は，その後，ペレドゥルによって手痛い仕返しをこうむることになった。次々と送られてきたペレドゥルの倒した敵対者たちによって，宮廷の人々の面前で彼の行為は糾弾され，すっかり面目を失墜してしまうことになったからである。他の『マビノギオン』の中の物語，「キルッフとオルウェン」の中では，髭男ディシス（Dillus）のエピソードで，アルスルがカイをからかったことから，二人の間に不和が生じ，後の悲劇が起こったということが暗示されている。アルスルの悪のりが過ぎて，自分の誇りが傷つけられたことに対する，カイの恨みがもたらした結果であった。この物語の中では，超人的な能力を持つカイの特徴が詳しく描かれている。何よりも，背が高く，熱血漢で，自分の体温で火をおこすことも可能な男であったとされている。その特徴はこの「ペレドゥル」物語でも明らかで，つねに「背高きカイ」（‘Cei Hir’）として登場している。

『カマーザンの黒い本』に収録されている，「門番は誰か」（‘Who is the Porter’）という詩の中では，カイが 9 人の魔女たちを殺したことが述べられていて，背が高く，復讐に燃え，激しい怒り

をもった無敵の戦士としてのカイの姿を髣髴とさせる記述がなされている。
しかしながら，この「三つのロマンス」をはじめとして，フランスものの影響を色濃く受けた後，アーサー王関係の書物の中でのカイのイメージは，はなはだ芳しくないものとなっているのである。

⑷　**グウェイル（Gweir）**

もう一人の騎士グウェスティル（Gwestel）の息子グウェイルという人物は，「ロナブイの夢」の物語の中で言及されているアルスルの相談役 42 人のうちの一人である。詩人たちが語る彼の性質は，きわめて陰気なものであった。また彼の母は，アムラウド・ウレディグ（Amlawd Wledig）の娘であり，アルスルの従兄弟の一人であるとされている。

以上のような数々の名だたる騎士たちの中で，群を抜いて人気のある，ウェールズの英雄ペレドゥルの魅力とは一体どんなところにあるのだろうか。
それはひとえに，彼の天衣無縫さを語る幼年時代のエピソードと，終始母親の言葉を守って行動する「母親の息子」的な性格づけ，考えるより行動に走る，一見性急ともいうべきほどにこだわりのない，颯爽とした態度等にあるように思われる。彼の最初の登場は，ある日，母親の飼っている山羊の群れの傍に，二頭の角のない動物を見つけ，てっきり山中で迷子になって彷徨った末，角をなくしてしまったのだろうと早合点して，これらの雌鹿たちを，森のはずれにある山羊小屋に追い込んだ「怪童」としてである。また彼の最初の冒険は，天幕を教会と思い込んで，母の助言に従って祈りを捧げたところから始まっている。そこに座っていた娘が手にはめていた指輪の宝石を，母の助言だからといって公然と所望し，食べ物と飲み物を無心する率直さには，少年ペレドゥルの無邪気さがよく描かれている。
アルスルの宮廷に到着したペレドゥルは，王妃グウェンホヴァルにワインをあびせ，彼女の頬を激しく打ちつけるという無礼を働いた騎士を追って，その仕返しをするという役を即座にかってでる。あまりもの騎士の振舞いにすっかり怖気づいてしまった他の家来たちは，いずれもその無礼を見てみぬふりをしようとしていたからであった。そのとき，「白と黒のまだら模様の青白い痩せ馬に乗り，みっともなく締りのない馬具をつけた」ペレドゥルが広間に入ってきたのである。その有り様は，宮廷中でも，ひときわめだって情けない姿であったと記されている。同じように，騎馬のまま，宮廷の広間に乗りつけた「キルッフとオルウェン」の物語の主人公，少年キルッフを思い起こすところであるが，その様子のなんという違いであろうか。金の馬具をつけた駿馬にまたがり，金色に輝く剣や楯をたずさえ，四すみに赤金の林檎の刺繍の施された紫色の絹のマントを身につけて，少年キルッフは宮廷に向かったのであるから。

しかし，実のところは母の言葉のような「天使」ではなかった，騎士という存在にいたく憧れて，少年ペレドゥルは変容してゆく。それはまさに男女の小人の予言どおりの，「戦士の長，騎士の華」，英雄ペレドゥル像の誕生を髣髴とさせるものである。
強さと，やさしさ，そしてたくまざるユーモアと一種の軽さをもあわせもつ，魅力あふれる，一人のウェールズの英雄の誕生を語る物語，それがこの「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」である。

参考文献

1） 使用テキストは，中野節子訳・徳岡久美協力，『マビノギオン』（JULA 出版局，2000）である。（　）の数字はページを表す。

2） Bartrum, Peter C., *A Welsh Classical Dictionary,* Cardiff, 1993.

3） Bromwitch, Rachel, edited and translated, *Trioedd Ynys Prydein*（*The Triads of the Islands of Britain*), Cardiff, 1961, second ed., 1978, third ed., 1998.

4） Goetinck, Glenys, *Peredur — A Study of Welsh Tradition in the Grail Legends,* Cardiff, 1975.

5） ────, *Historia Peredur vab Efrawc,* Cardiff, 1976.

6） Morgan, Gelard, *Y Tair Rhamnant*, Llandybi, 1965.

7） Stephens, Meic, *The New Companion to the Literature of Wales,* Cardiff, 1998.